Series 18
オーディオ
つれづれの記

音楽の思い出

前島 隆生

２０２１年１２月入会

音楽事始め

高校に入る頃贈られたアイワ製 FM レシーバーの美しい音に惹かれた。ダイヤル合わせが毎日の楽しみとなった。近所の方にトリオ・ロス・パンチョス公演に連れて行ってもらった。ラテンの明るさ、リズム、スペイン語に心酔した。新聞に広告があり母の薦めもあって「コンサートホールソサエティ」からレコードを定期購入する事になった。お陰でクラシック、ジャズ、ラテンまで幅広く知る事となった。その中のまだ少ない所蔵のレコードの一枚が後に宿命の始まりとなってしまった。

その頃、電蓄から LP プレーヤーに変わり、その喜びはひとしおであった。少ない小遣いでレコード店（当時は楽器屋さん）を覗くのが楽しみだった。

ある日、部屋の片付けをしていたら、天袋から SP が 30 枚ほど出てきた。後に母が若い頃から音楽好きであったと分かった。中にヤン・パデレフスキのトルコ行進曲があったのを憶えている。

アルゼンチンタンゴにはまる

1961 年 12 月コマ劇場でフランシスコ・カナロ楽団公演があり、親類宅のテレビで見た。まもなくレコードを入手、毎日のようにサファイア針を落とした。この盤はほぼすり切れた状態で手元にある。さて宿命のもととはこの盤と先に述べた一枚である。

大学入学時、満開の桜の中に聴き慣れた音がした。タンゴ研究会とあった。4 年間クラブ～神田神保町に有る喫茶店ミロンガ往復の毎日。そこでは名高い先駆者の方々と交流し知識を深めた。レコードからはポルテーニョ魂が音塊となって響いていた。

さてここで重要なのはバンドネオンである。決定的な音である。この悪魔の様な楽器の演奏技術の発達が、名楽団名手を生んだ。そもそも原曲は単純なメロディなので、だからこそ多様な編曲がされ多くの名演奏が生まれた。当然の事だが古典の一曲が楽団によって又は年代によって大きく編曲が変わる。又これがこの世界を一層面白くしている。ピアノ、バンドネオン、バイオリン、コントラバスが織りなす音は下町 B 級グルメでなくブエノスアイレスの移民系白人が作り上げた逸品料理である。発生から当代までの歴史がほぼ全て演奏の歴史として捉える事が出きるので、研究的鑑賞が出来た。

バイオリン製作

タンゴ研究会で鑑賞と並行して演奏活動をしようという事になった。楽器や奏者と難題が多かったが、7 年後練習の段階で発案者の私も参加するハメになった。無謀にもバイオリンを買い、合わせ始めたが、ド素人にはどうにもならない事がわかり手を引いた。後に、ふとバイオリンを手にとって「これって、自分で作れる？」と思ったのが始まりだった。本来の木工好きの格好のエサであった。

製作関係の情報不足のため、現物の寸法採りから始まった。面白半分苦労半分の戦いがスタートした。それから 10 年間独学で手順を覚えた。89 年美術出版社から川上 昭一郎著、新技法シリー

ズ「バイオリンをつくる」が発刊されたが、（日本初の本格的技法書である）独学と大きな違いは無かった。現在まで足掛け 40 年ほど約 30 台作った。この内 3 台はゴミと消えた。

音作りで大切なこと：良い材料と良い作り、名器の型は必須、名器と同じ音は再現出来ない。奏者が弾き易い楽器は可能性がある、機器による計測分析は無為に等しい。個々の音−音質については敢えて表現は出来無いが、時が経つと変化する。12 年前の木質に問題があった一台が、今は枯れたすてきな音を出している。全ての材料の中で経年成長するのは木材だけの特性のようだ。

参加している「バイオリン製作研究会」の展示試奏会へはかかさず出品し、一般の来客、奏者からの意見を大切に次の一台へステップアップする。プロの試奏で思った音が出たときの感慨は別格だ。

アマチュアの自由：過去の名人達がどういうプロセスで研究、製作していたのかは明らかになっている。今の私たちもいざ作ろうとすると同じ事を繰り返す。器用な人なら形は出来るが、しかし音作りは別の次元に入る。プロセスに対する試行錯誤を経験し、今は不明になってしまった足跡を実器で再現しようとするのも、名器の姿形のコピーをするのも、自分の形を作るのも自由に楽しんでいる。プロならばこんな合わない事はしないだろうが‥。

オーディオにも興味

かなり昔から Stereo Sound 誌はよく買っていた。美しくハイスペックで高価な製品の紹介ばかりであった。しばらくは手が出ず入門機レベルで組めたのは 30 歳を過ぎていた。

遅ればせながら気がついた事は機器単体の性能は勿論だが、良い音場作りは部屋の問題から始まり入口から出口までアナログ信号をどう扱って仕上げて行くかであって、相互に補完し合う機器の選定があると思う。拙宅のタンノイを見た知人のピアノ調律師の方に誘われ、お宅に訪問して Macintosh、クレル、マグネパンでピアノ曲を聴いたときの衝撃は忘れられない。同室にはコンサートピアノ 2 台が光っていた。